

霞

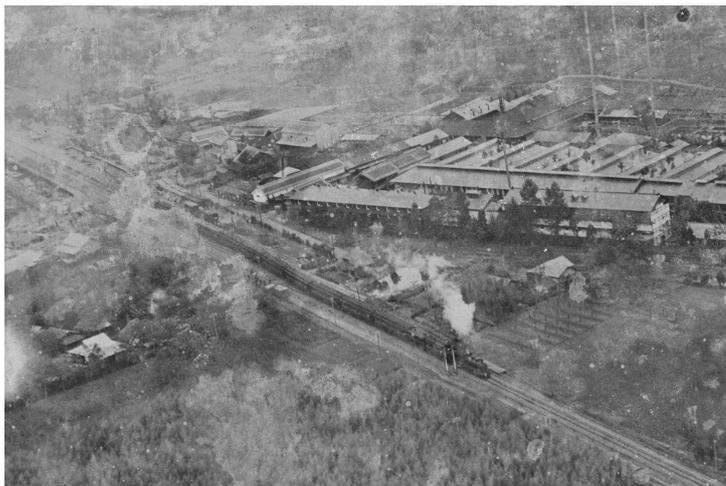
— 2024 年度夏季展示室だより —

令和6年7月2日発行(通巻第59号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(59)

古写真「荒川沖駅付近を走る常磐線」



目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(59)	1
○博物館からのお知らせ	1
○優美な灰釉陶器の短頸壺(古代)	2
○土浦藩の御用金借用(近世)	3
○講義ノートが出版される(近世)	4
○明治時代の古レール(近代)	5
○明治時代前期の霞ヶ浦の漁法(近代)	6
○市史編さんだより	7
○霞短信「赴任の御挨拶」	8
○コラム(59)	8
○情報ライブラリー更新状況	8

大正 11 (1922) 年頃に撮影された常磐線です。蒸気機関車は荒川沖から土浦方面に走っています。明治 28 (1895) 年に友部~土浦間、同 29 年に土浦~田端間が開業した日本鉄道土浦線(明治 42 年から常磐線)は、大正 11 年に荒川沖~土浦間が複線化しました。線路の西側に広がるのは明治 40 年創業の岡谷製糸所荒川沖工場で、煙突が立ち並ぶ姿はランドマークとなっていました。【情報ライブラリー検索キーワード「鉄道」】

博物館からのお知らせ

★★夏休みファミリーミュージアムを開催します★★

テーマ展「土浦の洪水記録と水の恩人・色川三郎兵衛」

○とき 7月20日(土)~9月1日(日)

※8月12日(月)を除く月曜日、8月13日(火)は休館です。

①図書館・博物館コラボ企画「土浦の歴史物語 一大水とたたかった人々」

(対象:小学校低学年の親子、定員10組)

土浦の洪水の歴史について学び、川口川閘門や色川三郎兵衛の銅像などの現地見学をします。

○とき 8月6日(火) 10時30分~12時30分 ○会場 土浦市立図書館(アルカス土浦)

②親子はたおり教室(対象:小中学生親子、各回定員2組、参加費200円)

「はたおりの会」を講師に招き、古布を使ったはた織り(さき織り)を体験します。

○とき 8月21日(水)・23日(金)・24日(土)

午前の部:10時30分~12時、午後の部:13時30分~15時

③戦争体験のお話をきく会(対象:どなたでも)

土浦に学童疎開をした方に、戦争体験のお話をうかがいます。

○とき 8月10日(土) 11時~、14時~

◆各イベントの申し込み方法◆

①……7月13日(土)10時から土浦市立図書館ホームページ申込フォームより

②③……7月9日(火)9時から土浦市立博物館(029-824-2928)に電話申込



博物館マスコット
亀城かめくん

1 ※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。最新情報については、博物館ホームページをご確認ください。

かいゆうとうき たんけいこ 優美な灰釉陶器の短頸壺

—霞ヶ浦周辺地域の物の流通—

平成4（1992）年、市内東部の八幡脇遺跡（市内おおつ野）の発掘調査で、優美な灰釉陶器の短頸壺（写真1）が発見されました。平安時代（10世紀）のもので、火葬骨を納める骨蔵器として用いられていました。平安時代に墓域と化した遺跡では、火葬骨を納めた骨蔵器が合計7点も発見されました。灰釉陶器の短頸壺以外は土師器や須恵器の甕が用いられており、この壺の存在はひととき異彩を放ちました。

灰釉陶器とは、植物を燃やした灰を原料とした釉薬（灰釉）を施した陶器です。良質な粘土を産出した愛知県北東部の猿投山山麓（愛知県豊田市から瀬戸市にかけて）などを中心に生産がなされ、8世紀後半から11世紀頃までの製品が確認されています。器が白く焼き上がる独特な粘土で成形し、斜面に築いた登り窯に近い構造の窯（穴窯）で焼成したものです。特に灰釉陶器の短頸壺は、焼成中に付着した燃料材の灰が溶けることで、器の表面に垂れる独特な灰釉の風合いが見られます。これまでの生産地と消費地での調査成果により、製品は碗・皿類を中心に大量生産されており、高級な焼き物として全国各地に流通したことがわかっています。灰釉陶器は、物資の集積地と考えられる遺跡で多く出土する傾向にあります。

八幡脇遺跡で出土した灰釉陶器の短頸壺は、猿投山山麓の窯で生産されたもので、口径13cm、高さ26cmです。短く立ち上がる口と丸く膨らむ胴が特徴で、意図的な欠損が見られます。明るい灰白色の壺の表面には、釉薬が人の手により薄く全体に施され、窯内の降灰による緑色の灰釉が垂れるように付着しています。

研究によれば、灰釉陶器の短頸壺は茨城県から千葉県常総地域で目立って出土していることが判明しています。その分布は特徴的で、茨城県内では常陸国府付近を中心に霞ヶ浦周辺域に広がりを見せており（図1）、都の置かれた中央とのかかわりの中で、灰釉陶器の短頸壺が骨蔵器として用いられたと考えられています。その背景には、新たな埋葬思想を受容した高級陶器を持てる集団の存在と、霞ヶ浦周辺域に発達した河川を利用した物資の流通状況も反映されていることが指摘されています。（関口満）



写真1 八幡脇遺跡出土の灰釉陶器の短頸壺
（当館所蔵）

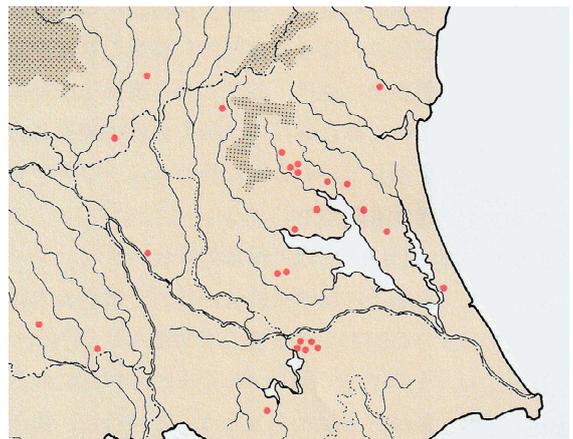


図1 灰釉陶器の短頸壺（火葬墓）の分布
『千葉県の歴史 資料編 考古4』2004を改変



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも古代コーナーに展示しています。

- 灰釉陶器皿（弁才天遺跡）
- 灰釉陶器蓋（弁才天遺跡）



土浦藩の御用金借用

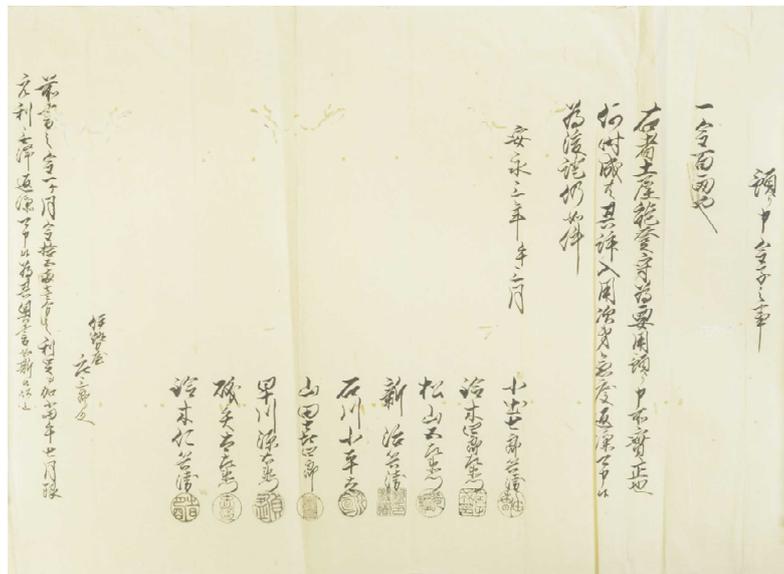
あずか もうすきん す の こと
— 預り申金子之事 —

土浦藩の藩財政については、現存する史料が乏しいこともあり、収支の規模や割合、支出項目、年ごとの変遷などは、ほとんど明らかになっていません。ただし、土浦藩は城下の商人に金銭を借用することがあり、この時の借用記録（借用証文）が遺されています。今回はそのうちの1点を紹介します。

安永3（1774）年3月、藩は中城町（市内中央）の伊勢屋庄三郎に金100両を借用しました。伊勢屋（菅谷）庄三郎は河岸問屋（船積問屋）や醤油醸造などを営んでいた商人です。菅谷家の系図には、同家は元々龍ヶ崎（龍ヶ崎市）に住んでおり、延享年間（1744～48）以前に中城町へ移り住んだと記されています。

藩が伊勢屋に金銭の借用を行った理由は「土屋能登守為要用」（土屋能登守篤直〔土浦藩土屋家4代当主〕が必要としているため）とのみ記されており、借用目的は判然としません。返済については「何時成共其許入用次第急度返済可申候」（いつでもあなたが必要になれば必ず返済する）とあるほか、「前書之金一ヶ月金拾五両壹分ノ利足ヲ加、当七月限元利無滞返済可申候」（前出の金100両は1か月につき金15両1分の利息を加えて、今年7月までに元金と利息とも滞りなく返済する）と記しています。返済計画まで明記していますが、証文が菅谷家に遺っていたということは、返済されなかった可能性が高いと考えられます。

借用にあたっては、藩の吟味役であった鈴木四郎左衛門や松山五左衛門、元締役の新治兵衛、年寄の山田喜四郎・早川源右衛門、執次の磯矢太左衛門、家老の鈴木仁兵衛など、藩の上層役人が連名で文書を差し出しています。このことから、伊勢屋への借用は藩士個人によるものではなく、藩として必要な借り入れであったと考えられます。



預り申金子之事（当館所蔵）

18世紀後半以降、土浦藩は毎年のように伊勢屋へ御用金の借用を繰り返しています。例えば天明6（1786）年には、3月から9月にかけて、藩は伊勢屋に7回借用を行っており、この総額は1,790両に及びました。また、藩は伊勢屋のみならず、江戸崎（稲敷市）の鍋屋忠兵衛にも借用を行っており、両者の仲介は伊勢屋が行っていました。伊勢屋のような城下町商人は、結果として、藩財政を支えることになったと考えられます。

（西口正隆）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 菅谷家系図（当館所蔵）
- 諸士年譜（当館所蔵）



講義ノートが出版される

やまむらさいすけ
—山村才助「西洋雑記」—

博物館に隣接する亀城公園の管理事務所脇に「山村才助贈位紀恩之碑」がひっそりと立っています。大正9（1920）年10月、山村才助（1770～1807）の従五位贈位を記念し、曾孫山村慶二が建立しました。篆額は元土浦藩主の子孫土屋正直、文は大槻玄沢の孫如電、書は才助の伯父市河寛斎の孫三陽ら、ゆかりの人々が力を合わせ、才助の業績を静かに伝えています。

土浦藩士で地理学者の才助は、江戸深川の土浦藩邸に生まれました。幼い頃から「輿地記載の書」を好んだと自ら語っており、早い時期から世界地理への興味を持っていたようです。蘭学界においては医学を志す人が多かった当時、才助は世界地理を専門にし、大槻玄沢（1757～1827）の門人となって励みました。才助は、新井白石（1657～1725）が宝永6（1709）年に著した地誌「采覧異言」をひとつひとつ検証し、本文12巻、地図1巻の大著「訂正増訳采覧異言」を享和2（1802）年に完成させました（「霞」15号参照）。このとき才助は33歳でした。

才助の数ある著作のなかで唯一出版されたのが「西洋雑記」です。大槻玄沢の講義を聴講していた際、「ときどき人が驚くような話が出たので、ふところから紙を取り出して記録していた」と才助は述べています。講義中に書き溜めたノートから外国の珍談や奇談をまとめ、「西洋雑記」が誕生しました。アダムとイブが人間のはじまりであること、アレクサンダー大王やモーゼ、マホメット、怪鳥や鬼の話、ノアの方舟やバベルの塔など、聖書に題材をとったものから、アフリカやアメリカの話まで、書名に「雑記」とあるように内容は多岐にわたっています。

才助は文化4（1807）年9月、38歳で没しました。その前年には「華夷一覽図」「亜細亜諸島志」「印度志」「魯西亜国志」を、亡くなる年の4月には「百見西亜志」を完成させています。執筆の過労が死を早めることになったのかもしれません。

「西洋雑記」が刊行されたのは才助没後40年以上たった嘉永元（1848）年で、慶応2（1866）年には再版されました。開国後間もない日本において、海外の知識や世界の歴史を知ることができる書物として流布したようです。

（参考：鮎沢信太郎著『山村才助』1989年）

（木塚久仁子）



山村才助「西洋雑記」（当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 「坤輿万国全図」（市指定文化財 当館所蔵）
- 「訂正増訳采覧異言」（当館所蔵）



明治時代の古レール

ふる
にばんばし
—二番橋に使われた鉄道遺物—

土浦市域に神立・土浦・荒川沖の3駅がある常磐線は、明治28（1895）年11月に友部（笠間市）～土浦間を、同29年12月に土浦～田端（東京都北区）間を日本鉄道土浦線（以下、土浦線）として開業しました。来る令和7（2025）年には開業130年を迎えようとしています。

常磐線の線路には、台地を削り、切り通しとなった場所に敷かれたところもあります。市内富士崎二丁目から小松ヶ丘町の切り通し部分には、水戸方面から順に、一番橋、二番橋、三番橋と呼ばれた橋が架かっていました。一番橋・二番橋（写真1）は、自動車は通行できない人道跨線橋で、二番橋はかつて阿波街道と呼ばれた古道が通ったところに位置していました。三番橋は昭和54（1979）年に架設され、バス路線が通りました。長く住民らに利用されてきた一番橋・二番橋でしたが、老朽化が著しく安全性を保ちながら修理することが困難であることから、一番橋は撤去し、二番橋は架替工事が進められ、令和7年度に事業が完了する予定です。この工事に伴い、博物館では、令和5年に二番橋の橋脚として転用されていた古レールの調査を行いました。

写真②は、二番橋の橋脚に転用されていた古レールの一部です。二番橋は、土浦線（友部～田端間）が開業した明治28～29年頃に建設された可能性がありました。製造年等の刻印が残る古レールを切断し確認したところ、大小37本分の古レールに、製造元や発注者の手がかりとなる刻印が見つかりました。製造年がわかるものは11点あり、その内訳は明治18年1点、同19年3点、同26年1点、同27年が6点で、日本鉄道を示す「N.T.K」またはその一部、官営鉄道を示す「I.R.J」が発注者として確認できました。二番橋の古レールが明治期のものであると判明したことから、博物館では鉄道遺物として保存するため、令和5年度に次の刻印が残る2本の古レールにさび止め等の処置を施しました。

UNION D 1886 N.T.K

（製造者：ドイツのユニオン社／製造年：明治19年／発注者：日本鉄道）

BARROW STEEL Sec 166 1893 I.R.J

（製造者：イギリスのバーロウ・スチール社／製造年：明治26年／発注者：官営鉄道）

ところで、これらの古レールがいつから二番橋で用いられたのかは明らかではありません。ただし、大正11（1922）年には、土浦～荒川沖間が複線化しています。複線化工事に伴い、切り通しの拡張が行われ、二番橋も延伸のために架け替えられた可能性があります。今回保存した上記の古レールは、この時に転用されたのではないかと考えています。

（野田礼子）



写真1 手前：二番橋 奥：一番橋
令和4（2022）年撮影



写真2 刻印が残る二番橋の古レールの一部
令和5（2023）年撮影



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しています。

- 絵葉書 土浦大洪水汽車進行の景（写真パネル）個人所蔵
- 荒川沖駅付近を走る常磐線（写真パネル）当館所蔵



明治時代前期の霞ヶ浦の漁法

—内水面の漁業調査報告から—

霞ヶ浦の風物詩、観光帆引き船の季節となりました。帆引網漁は、明治10年代に坂村（かすみがうら市坂）の折本良平によって考案されたものですが、往時の霞ヶ浦では多種多様な漁法がみられました。その様子を具体的に教えてくれる資料が「湖川沼漁略図並収獲調書」です。明治13（1880）年に茨城県が刊行したもので、県内の川や湖、沼などでみられる33種類の漁法が報告されています。いずれの項目にも漁の様子や漁具などを示す挿絵が添えられ、その上段には年間の漁獲額・地名・漁期・漁に必要な経費などが記載されています。

このうち霞ヶ浦・北浦周辺についてみると、15種類の漁の報告があり、土浦の「四ツ手網漁」などが掲載されています。これらの漁法は、1日当たりに得られる漁獲金額が50銭以下にとどまるものがほとんどで、挿絵に示された漁具などからも、小規模な漁であったことがわかります。一方、ハヤ（コイ科のウグイの地方名）を対象とする大徳網、コイ・フナを漁獲する川地曳・於朶漁、イサザを漁獲する魴網は1円を超えています。これらは大きな収益を得ることができましたが、大徳網や川地曳の経営にはいずれも資金が必要で、とくに網を引くために大人数の曳子を雇用することから経費がかかりました。それなりの資本力が必要だったということになります。

折本良平により考案された帆引網漁は、1人ないし2人といたった少ない人数でも操業が可能で、大人数を要する大徳網漁などとは対照をなすものでした。明治20年代以降、帆引網漁は改良を重ねながら霞ヶ浦・北浦の漁師たちの間に普及し、やがて大徳網と双璧をなす湖の代表的な漁法に発展していきました。

（萩谷良太）



「湖川沼漁略図並収獲調書」
（当館所蔵）のうち「大徳網漁」

漁法名称	地名(カッコ内は現行市)	対象魚	収獲高(年)	1日平均	雑費(経費)
於朶漁	伊佐津村地先小野川(稲敷市)	コイ・フナ	14円10銭	4円70銭	1円26銭
大徳網	牛渡村地先霞ヶ浦(かすみがうら市)	ハヤ	240円3銭	2円66銭7厘	319円66銭7厘
川地曳網漁	息栖村地先濁川(神栖市)	コイ・フナ他	73円50銭	1円22銭5厘	86円
魴網漁	札村地先北浦(鉾田市)	イサザ	60円	1円	16円32銭5厘
四ツ手網	土浦町地内渠溝(土浦市)	コイ・フナ他	40円32銭	42銭	2円30銭
鰻縄漁	牛渡村地先霞ヶ浦(かすみがうら市)	ウナギ	45円9銭	33銭4厘	3円68銭
鮎曳網漁	牛渡村地先霞ヶ浦(かすみがうら市)	シラウオ	36円	30銭	4円
簀巻漁	潮来村地先波逆川(潮来市)	コイ・フナ他	40円50銭	30銭	8円50銭
建網漁	浮島村地先霞ヶ浦(稲敷市)	コイ・フナ他	22円50銭	25銭	2円30銭
蝦樽漁	柏崎地先霞ヶ浦(かすみがうら市)	エビ	18円90銭	21銭	11円68銭9厘
掛網漁	古渡村地先小野川(稲敷市)	ハヤ・フナ	6円	20銭	1円
片貝漁	牛渡村地先霞ヶ浦(かすみがうら市)	カタガイ	13円12銭5厘	17銭5厘	1円50銭
鰻筒笠	浮島村地先霞ヶ浦(稲敷市)	ウナギ	5円98銭4厘	8銭8厘	1円50銭
蝦筒笠漁	松山村地先小野川(稲敷市)	エビ	11円25銭	9銭	3円80銭
立笠漁	潮来村地先波逆川(潮来市)	エビ	6円	4銭	60銭

「湖川沼漁略図並収獲調書」にみられる霞ヶ浦・北浦周辺の漁
（一部抜粋して作成）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 「霞ヶ浦四十八津掟書」 （レプリカ）
（近世コーナーに展示）
- 霞ヶ浦周辺の漁具
（近代コーナーに展示）



市史編さんだより

五十音の起源—明覚撰『悉曇要訣』—

令和3（2021）年3月から開催された第42回特別展『東城寺と「山ノ荘」—古代からのタイムカプセル、未来へ—』では、東京国立博物館から2つの経筒が里帰りして展示されました。そのうちの1つ、保安3（1122）年8月18日銘の経筒には「聖人僧明覚」の文字が刻まれていました。「明覚」として想起されるのは土浦市史資料集『土浦関係中世資料集 上・下巻』（平成27・31年刊行）で参考にした『大正原版大蔵経 第八十四冊』（新文豊出版、1975年）です。

実は、東城寺の経筒の「聖人僧明覚」が誰なのかは、現在も研究が続けられています。ここでは、可能性のひとつとして議論され、『国史大辞典』でも取り上げられている明覚（1056～？）の著書『悉曇要訣』のお話をします。明覚は、比叡山に登って悉曇（梵字）の学を修め、学問を独自の立場で開拓して後世に影響を与えた人です。

『悉曇要訣』は、『大蔵経 第八十四冊』に収録されていて、読むことができます。この著作は、五十音図の原形が書かれていることで有名です（写真1）。明覚の没年は嘉承元（1106）年とされているため、著作はそれ以前のものであり、当時の国語の音韻が『悉曇要訣』には記述されていて、後世に大きな影響を与えました。また『悉曇要訣』の古写本は2種類あり、そのひとつは天福2（1234）年書写の筑波大学蔵本です。茨城県にゆかりのある著作ともいえるでしょう。

『大蔵経 第八十四冊』には、ほかにも五十音図など悉曇文字についてよく利用されるものが収録されています。鎌倉時代の弘安9（1286）年信範作の『悉曇秘伝記』と、江戸時代の天和2（1682）年刊行の河内延命寺僧浄厳『~~秘~~（悉曇）三密抄』です。特に『悉曇三密抄』には、梵字の意味の解説や五十音図も載せられています（写真2）。

『大蔵経 第八十四冊』は、悉曇文字（梵字）について解説する難解な書物です。しかしそれを見ていくと、現在でも小学校で誰もが学習する五十音図も、明覚などの僧侶が難しい梵字を研究して完成していったことがわかります。

（市史編さん係 江島万利子）

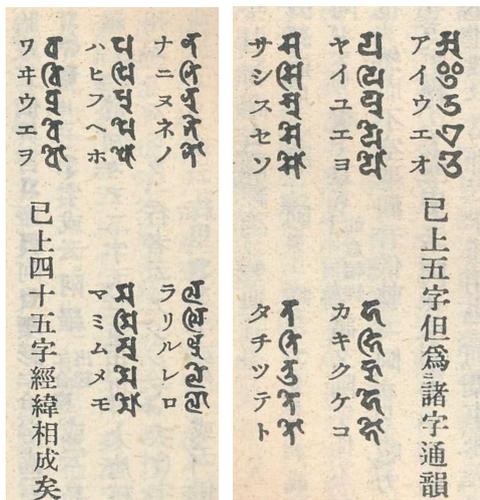


写真1 『悉曇要訣』の五十音図
『大蔵経 第八十四冊』529・530頁より転載



写真2 『~~秘~~（悉曇）三密抄』の五十音図
『大蔵経 第八十四冊』728頁より転載

霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

前号に引き続き、本年4月1日付で土浦市立博物館学芸員となった2名の職員のうち、石原学芸員が抱負を語ります。

赴任の御挨拶

はじめまして。

4月より土浦市立博物館の学芸員として勤務しております、石原千尋^{いしはら ちひろ}と申します。今回はこの場をお借りして、私が学芸員を志した理由を述べ、自己紹介に代えさせていただきたいと思っております。

学芸員を志すきっかけとなる出来事は、大学時代にありました。

大学1年生の時に受講した講義の中で、初めて江戸時代の古文書に触れることができました。その時、昔の人が書いた言葉を読み解くことで、初めて歴史というものが紡がれていくということを知り、古文書の魅力にときめいたことを今でも鮮明に覚えています。しかし、当時はまだ、その古文書がどこからやってきて、なぜ今日の私たちが目にすることができるのかについては知りませんでした。

大学2年生になり、古文書の調査・研究を行う研究会へ入会しました。その研究会では、古文書を所蔵する方（所蔵者）がいることを知り、その方にお話を聞く機会があったり、今日にいたってもなお地域や家に眠っている古文書があること、それを一つでも多く発見し、守り、後世へ伝えていかなければならないということに勉強しました。そして、この時初めて、このような大事な役割は、私たち地域の学芸員が担っていかなければならない仕事の一つであることを知りました。

このような経験から、私は、地域の歴史を守りながら、地域の方のみならず多くの人々にこれらを伝えていく仕事をする「学芸員」という職業に憧れをもちました。土浦市は県内でも有数の歴史ある街として知られていますが、これらの歴史を紡いできたのは、地域の方と共に歴史を守り続けてきた学芸員がいるからであると思っております。

私もいつか「土浦市の歴史を紡ぐ学芸員」になれるように、初心を忘れず、日々精進して参りたいと思っております。今後とも、何とぞよろしくお願いいたします。
(当館学芸員 石原千尋)

コラム (59) 自身の先祖を知る

昨年5月に祖父が亡くなり、葬儀のため約10年ぶりに熊本県へ向かいました。10年前の私は大学へ入学したばかりで、祖父の家に古文書があることは知っていたものの、ほとんど無関心でした。加えて、当時は「くずし字」を読むことができず、古文書を見ても何も理解することはできませんでした。あれから10年。法要を済ませたのち、祖父宅で古文書などを目にする機会がありました。古文書を読むことで、先祖が熊本藩の大庄屋である「手永^{てなが}」を務めていたこと、村内で年貢を支払えない百姓の肩代わりをするなど、村役人としての務めを果たしていたことなどを確認することができました。灯台下暗し。歴史研究に携わっているのであれば、自身の先祖についても理解を深めなければならないと痛感しました。その後、調べているうちに、祖母方の先祖は熊本藩士^{インチョン}で、近代には第五十八銀行の大阪本店支配人や韓国の仁川支店長を務めたという記録も発見しました。古文書を紐解けば、まだまだ発見がありそうです。
(西口正隆)

情報ライブラリー更新状況

【2024・7・2現在の登録数】

古写真 604点 (+2)

絵葉書 514点 (+0)

※()内は2024年5月18日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2024年度

夏季展示室だより(通巻第59号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2024年度夏季展示は、2024年7月2日(火)~9月29日(日)となります。「霞」2024年度秋季展示室だより(通巻第60号)は2024年10月1日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。